



Title	ミントン社の系譜にみるデザイン展開：ヴィクトリアン・タイルを中心に
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53257
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ミントン社の系譜にみるデザイン展開 —ヴィクトリアン・タイルを中心に—

吉村典子／京都工芸繊維大学大学院博士後期課程

はじめに

19世紀を中心としたイギリス・デザインを実際的な状況から明らかにするために、これまでこの時代のタイル（総称してヴィクトリアン・タイルと呼ぶ）を対象に、需要と供給の両サイドから調査を進めてきた。とりわけ近年は、製造業者側の活動に視点を置いている。今回の発表では、その中でも当時の代表的製造業者の一つであるミントン社を取り上げ、その発生と展開を示すことにした。同時に、デザイン史において商業主義的なものとして扱われることの多い19世紀の製造業者の活動を再検討してみることにした。その際、ミントン社の活動内容を示す1つの試みとして、後継者の在任期ごとに、その内容を考察することにした。彼らは、後継者としての地位にあるだけではなく、それぞれの活動の中に特色ある内容をもち、そこに在任期の時代的特徴もみることができるのである。

1 ミントン社の系譜とその主な活動

1793年に創立したミントン社は、19世紀後半から様々な組織に枝分かれしていくが、その中でも今回対象としたのは、創始者トマス・ミントンからの事業を継承する系譜、即ち、ハーバート・ミントン、コリン・キャンベル・ミントン、そして、ジョン・キャンベルへと続く系譜である。それぞれの在任期と活動内容は以下の通りである。創始者のトマス（1793-1836）は、彫版師出身ということもあり、装飾表現には常にこだわりを示しながら生産の合理化をはかり、原料入手から販売に至るまでのシステムを形成している。

2代目ハーバート（1836-1858）は、特に古美術品の美を新しい技術で再現することに力を注ぎ、さらにその技法を使った独自の製品づくりを試みている。タイルはその1つであり、彼の代からはじめた事業である。3代目コリン（1859-1885）は、製品のデザイン面に力点をおいた人物である。前衛的デザイナーとの提携、技術力のある外国人の雇用、そして、芸術陶器部門を開設している。4代目（厳密には5代目）のジョン（1900-1934）は、専属デザイナー、レオン・ソロンらによるアール・ヌーヴォー様式の新しいデザインを売り出し、特異的な時代を形成している。

2 ヴィクトリアン・デザインとミントン社

このように、在任期ごとに特徴ある活動がみられ、さらにその在任期間は、19世紀デザインの変化の波とほぼ一致していることに気づく。在任期ごとの活動内容と19世紀を中心としたデザインの変遷を比較するために、各在任期の内容と、ミントン社以外の例も含めた当時の全体的なタイル・デザインの変遷を重ね合わせてみるとした。現存する作例や、代表的タイル製造業者の商品カタログを基本資料とし、そのデザインの変遷を調べてみると、大きく3つの時期に分けることが可能であった。この3つの時期が、ミントン社の後継者のそれぞれの在任期とほぼ一致しているのである。タイル・デザインにおける1840年代から50年代（第1期）は過去の文様に倣ったデザインを主とした時代で、ミントン社の系譜においては、ハーバートの在任期にあたる。続く1860年代から80年代（第2

期)は、最も多種多様な文様表現がみられ、コリンの在任期とほぼ一致している。そして、1890年代から1910年代(第3期)は、アール・ヌーヴォー様式の植物文様が主流になり、ジョンの時代と重なっている。時代的一致は偶然のこととしても、この時代区分を一つの目安としてそれぞれの内容をみてみると、全体的なタイル・デザインの特徴に、ミントン社の活動がかなり重要な位置で関わっていることが指摘できる。例えば、第1期において、歴史的遺物となった中世タイルの再現を早い時期から取り組んでいたのがハーバートであり、第2期では、多様な文様表現をもたらす要因でもあった芸術陶器部門を他のどの製陶業者よりも早く開設したのがミントン社であった。そして、第3期においては、イギリスにおいて早い時期からアール・ヌーヴォー様式のデザインを手掛けている。こうした点は、タイル・デザインの変遷だけではなく、19世紀を中心とした全般的なデザインの変遷に置き換えると、ミントン社の先導性、重要性をみることができる。タイル・デザインの変遷における第1期は他の状況をみても、歴史主義的装飾思考が主流であった。ミントン社は、そうした欲求に対して、新技术で過去の表現を忠実に再現している。第2期は、様々なデザインにおいて唯美主義が高揚したが、その代表例でもあるゴドウィンの『芸術家具』が公表されたのが1877年(一部71年)、ドレッサーの美術家具商連盟が設立されたのが1880年である。ミントン社の芸術陶器部門は1871年に設立されていることから、唯美主義の全体的な動きの中でも早い時期から活動していたと言える。第3期に見られるイギリスにおけるアール・ヌーヴォー様式の表現も、ミントン社のデザイナーたちの作品が、雑誌The Studioにおいて、その創刊年から取り上げられている。このように、タイルを対象

にした製品を通してみても、また、当時の全般的なデザインの流れにおいても、ミントン社の活動は、先導的な部分をもっていることが指摘できる。

3 ヴィクトリアン・タイルの中でのミントン社の位置

では、タイルにおけるミントン社の特質は何であろうか。他社との比較において観察できる特質として、よりタイルの装飾性が追求されている点があげられる。タイルの表面の文様デザインのために雇用したデザイナーの数も他社に勝り、実際的な製品においても、より細やかで、手の込んだ表現がみられる。また、その使用場所においては、室内の装飾材としてデザインされているものが主流である。一枚ないし数枚で構成される緻密な文様表現をもつものが多く、用途は、家具・暖炉用が中心である。ヴィクトリアン・タイルは、タイルの機能の中でも装飾性の豊かさと、用途の広がり、とりわけ、室内の装飾材としての積極的な導入が特徴である。ミントン社の製品にみられる特性は、いわばヴィクトリアン・タイルの本質的な部分と言える。

おわりに

これまで19世紀を中心とした製造業者のデザイン活動は、当時の著名デザイナーの活動に倣って、あるいは、それを商業主義的に展開したものとして取り上げられる傾向にあった。しかし、以上のような点を考えると、ミントン社の例は、19世紀の全体的なデザインの流れにおいても、かなり重要な部分でその特徴形成に関わっていると言える。また、考察対象としたタイルにおいても、ヴィクトリアン・タイルの、最もヴィクトリアン・タイル的特性がミントン社を通して形成されていると言えるのである。